シリーズ

西淀川記憶あつめ隊

Vol.21

矢野 初憲 さん

新しくあおぞら財団の理事に就任された矢野初憲さんは、1944年に西淀川の福で生まれ育ちました。大阪市民生委員児童委員協議会副会長であり、西淀川区民生委員児童委員協議会会長を務めておられます。

2017年9月25日
聞き取り

◆福は仲買人の街

「福町は漁師や、水産加工品の製造、中央卸売市場の仲買人をしている人が多くて、家は水産加工品を入れる木箱を作ったんや」と、福のまちが大阪湾の恵みを中心に生活を営んでいたことを教えてくれました。「生では価値がないイカの臓物をぬいて茹でて、加工したら中華料理屋で使ってもらえる。価値がないものでも価値があるものに作り替えるのが、福のまちはうまかってん」と、資源を大切にする逞しさがありました。

「小学校4年生の時から親戚の仲買人の手伝いをしてて、朝の4時から8時まで野田の中央卸市場で働いて、それから学校に行ってた。中学校卒業後は、東洋ゴムに就職したんやけど、その頃は工場への働き口がたくさんあったんや。地域からも40人ぐらい働きに行ってたと思う」と、昭和30年代半ばの工業化の波の中で、金の卵と呼ばれた中卒の労働者の1人として工場労働を選択しましたが、「家の仕事も手伝わないかんし、工場労働は3交代で不規則やから、なかなか家のことを手伝われへんから、17歳ぐらいからまた朝は中央市場の仲買人の仕事を手伝って、8時以降はトロ箱（木箱）つくるようになったんや」と福の水産業と共に歩むことになります。

◆東洋一の卸売市場

当時の野田の卸売市場は東洋一の規模を誇り、「大阪で売れないものはない」と言われて、全国からいろいろなものが集まってきました。福の仲買人は豊かで、福島や西区、開発が進んでいた北摂に借家を立てる人が多く、地域の盆踊りにもキップよくお金を使っていたので、河内音頭の本家筋の人を呼ぶほど景気がよかったそうです。

◆福に留まる

「子どものころは、朝起きたらパンツ一丁で淀川に飛び込んで顔を洗ってたけれど、中学校のころから油が身体について気持ちが悪くなって、2年生のころから入らなくなった。昭和35（1960）年ごろは大野川がすでに汚かった。工場からの煙もあって夜は寝苦しい。玉ねぎがくさったような臭い。昭和41～42年ごろはえげつなかった」と、福から引っ越しする人がたくさんいました。その中で矢野さんが福に留まったのは「福の街を開拓したのはおじいさんやから、福のまちをどないかしなあかんと思ってた。両親が公害患者会に入って活動したのもその思いから。福はもともと保守の勢力が強いけれど、こんな酷いことされたらたまらないということで、川上寛一さんや沓脱タケ子さんと手を組むことになったんや」と、自宅でミニ集会をよく開催していたと語ってくれました。

◆建築業に転職

卸売市場が茨木や東部に分割してつくられたこと、小売りがスーパーマーケットに転換する中で、仲買人の役割が小さくなっていきました。そこで、40歳ごろに親戚が営んでいる建築業者で働くことになり、ものを作る面白さに目覚め、矢野さんは新しい力を発揮します。

「いろんなことをしたけれど、琺瑯（ほうろう）パネルの取り付けの業者を育てる仕事をしたよ。大阪モノレールやポートライナーの駅の外壁に使われてる金属パネルも取り付けたよ」と、大阪の経済発展の歴史と共にあった矢野さんの人生に、感動しました。

◆人の面倒をみるのは家柄

地域での活動は28歳の時に青少年指導員、子ども会の役員をしたことからずっと子どもたちに関わり続けています。「小さいときからガキ大将やったし、面倒をみるのは家柄もあるかもしれん。小さい時に兄同然の近所の人が7～8人ほど毎日家に来て、ご飯を食べさせてた。当時は食べるものがなかった。父母の気持ちを受け継いでるんだと思う」と、福に生きる人々の幸せを願う矢野さんに、西淀川の心意気を感じました。

林